

水上勉 樹下太郎 笹沢佐保集

日本推理小説大系 15 東都書房

日本推理小説大系第15卷

水上勉 樹下太郎 笹沢佐保集

定価三八〇円

著者、 水上勉 樹下太郎 笹沢佐保

発行者、 西村俊成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三三二

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三十六年六月二〇日第一刷

目次

水上勉

海の牙 5

おえん 95

樹下太郎

夜の挨拶 105

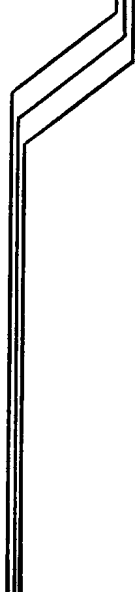
散歩する霊柩車 178

笹沢佐保

招かれざる客 189

解説 荒正人 294

水上勉



海 の 牙

序章 猫 踊 り

陽がかけると、岩の巻貝が波打ちぎわに落ちこぼれた。

貝を拾っている子供は五人いた。中に女の子が一人まじっている。どの子も裸足だった。男の子たちは、汚れたメリヤスのシャツと、つぎはぎのある木綿のシャツを着ていた。みんながズボンの裾を膝までまくりあげている。女の子は赤いふるびたメリヤスの着物だった。その着物の膝のあたりに穴があき、裏生地が見えた。女の子も裾をまくりあげ、その端を縄のように細くなった兵児帯にたぐりこんでいた。膝がしらの白い子である。やせているので、くるぶしとがとび出ている。

どの子も、古い空罐や、角のまるくなった弁当箱をもっていた。磯波はゆるく、土色に陽焼

けた子供たちのふくらはぎのあたりへ間断なく打ち寄せていた。

ピナと呼ばれているその巻貝は、田螺たなのような三角形の小さな貝である。子供たちは空罐や弁当箱にこのピナを拾いあつめていた。貝は家に持ち帰って母親の手で湯通しされる。それが夕食のかわりになるのだった。

四月はじめの海の風はなまあたたく、水は冷えていたが、岩と岩のあいだや、砂浜へ入りこんでいるたまり水はぬるんでいた。

青い水苔のひかる岩の上に、一人だけよじ登って腰をかがめていた男の子が、とつぜん磯のほうを見て叫んだ。

「ウメコ、どげんしたと？」

その声で、水の中にいた子供たちはいっせいに砂浜を見た。さきほどまで水際にいたはずの女の子が、砂の上で、膝を組み合わせるような恰好になり、前のめりに倒れるのが見えた。

「ウメコ、どげんした？」

また、岩の上の子が叫んだ。

女の子は返事しなかった。砂に腹ばいになつたまま、ざんばら髪を二度振るようにな動いた。髪の上に砂と水がかかり、チカッと光った。倒れた瞬間に、女の子はアルマイトの弁当箱をひっくりかえし、ピナがこぼれ出た。

「ふるえとるぞ」

別の男の子が水しぶきをあげて砂浜に走った。そして、倒れた女の子の顔をのぞくと、すぐ振りかえって叫んだ。

「猫のごつ、ふるえとつち……」

岩の子も、近くにいた子も、獲物入れの罐を胸もとにもちあげて女の子のそばに走ってきた。

「どぎゃんした、ウメコ」

背のたかい年長の子が、さしのぞくようにして顔を見た。膝がしらを砂にめりこませているウメコの裏がえしになった足が小さきみにふるえている。くちびるの色が紫がかっている。それが何度も大きくふるえた。ウメコは何か言いたそうだったが、声が出ないようである。そして、曲げていたその細い手をのぼした。這いつくばう恰好になった。膝のふるえはつづいていった。何か口の中で言ったようだが、はっきり聞えず、ウメコは上体をよじるようにくねらせた。うつむいたまま、手足をふるわせているのだった。

「腹が痛かじゃなっか」

そう言って年長の男の子は、また顔をさしのぞいた。急に、この子の顔色が変った。だらしなくあいているウメコの下唇から、涎が長く垂れおちるのを見たからである。白い水飴のような涎であった。ウメコのうつろな瞳孔は砂浜を見ていた。が、力がなかった。こぼれたピナ貝をウメコは砂にめり込ませながら手をつかえ、う、う、う、とかすかな呻きを訴えた。それから、やにわに涎の糸をひきながら這いだしたのである。

年長の子はへこんだ眼をまんまるく見開いていた。が、急に踵をかえすと、半泣きの顔に

なつて崖上の村へ走りだしていた。

せり上がる傾斜の崖には、ところどころに黒い蜜柑の木が見られた。そこにトタンぶきの屋根を光らせた小さな家が、乳色の霧の中でかすんでいる。磯から崖に上がる坂道は九十九折になつて見えた。石垣と青草のはえた道が段々になつて見え、その道を駆け登る子供の姿はみるみる小さくなつた。空罐が子供の腰でおどろくまでかわいた音をたてた。

子供はトタンぶきの家の前までくると、積みあげた茶色い石段を一気に飛びこえて叫んだ。「ウメコが猫踊り病にかかったあ、お父つあん、おっ母ん……」

母親は台所にいた。父親は母屋おやぐらの隣りの網小舎で地曳網をつくらつていたが、竹針をもつたままちょっと子供のほうを見ただけであつた。すでに母親は表に飛びだし、顔色をかえていた。

「おっ母あ、ウメコが大変だよッ」

母親は、せっかちに走る子供からおくれて小走りに歩いてゐたが、磯が見える地点にきて、遠くにむらがつてゐる子供たちの姿を見たとき急にやせた顔をひきつらせた。

ウメコはうす目をあけていて手足を間断なくふるわせてゐるばかりだつた。ものが言えないのだ。

「ウメコ、ウメコ、ウメコ……」

母親は髪をふり乱し、汐焼けした手で少女の肩をしつかりつかんだ。はげしい痙攣がつつ

わつてきた。やにわに母親は、うつ伏しているウメコを小脇に掻き抱いた。涎が長く糸をひき、母親の手に落ちかかった。

「ウメコ、ウメコ……」

絶叫する母親の顔は涙に汚れ、まっ青にかわつてゐた。突然、彼女は少女を抱き上げながら崖に向かつて走りだした。母親の膝がしらが紅い腰巻を割つてむき出しのまま遠ざかつて行つた。

「お父、お父……猫踊りにかかったと、お父」網小舎の中から父親が飛んできた。ウメコを抱きあげた。母親は数居ぎわに手つき、夫の足もとにしがみついて泣きくずれた。

「おら、駐在へ行つてくつから」

そう言つてウメコを家の中の建の上に寝かせた。その瞬間、ウメコは汚れた砂だらけの尻をまるだしにして建の上をころげ廻つた。やがて、くるくると宙がえりをはじめた。苦痛を訴える少女の目に、けもののような光りが見えた。

トタン屋根の暗い下から、村の静かな空気をひき裂くような母親の泣きわめく声がいつまでもひびいてゐた。

九歳になるこの少女が、あとで「水瀉奇病」といわれる原因不明の恐るべき第一号患者となつた。

ウメコは、発病して十五日目に水瀉市立病院で死んだ。死ぬ間際に、この少女は看護婦の制

止する手をはねのけ、体を宙に飛びはねたり、くるりと反転させたりしたのち、悶絶した。

入院した直後、医者ははじめ日本脳炎でないかと診断した。しかし、食物も水も受けつけないう上に、手足や腰をふるわせてゐるばかりで、手のほどこしようがなかった。すぐに極度の栄養失調になつた。頭でつかにオガラのようにやせ細つたウメコは、お玉じやくしのように足をふるわせて寝てゐた。十五日目の朝がた、医者や看護婦が茫然と見てゐる前で、突然、起き上がるや一時間ほど激しい痙攣けいれんのような発作をつづけた。狂死したのである。

これは、猫の死にざまと似てゐた。この地方には、数年前から、猫踊りといふえたいの知れない病気が猫を襲つてゐた。魚や貝のくさつた部分を猫が喰う。病気にかかると急に手足を痙攣させ、二三日目にやせ細り、地べたをころげ廻つたり、宙がえりをして狂死するのだった。どの猫も、うす目をあけたままで口からはげしく涎を垂らしながら死んでゐた。

ウメコの場合、両親は日頃から顔色のわるい娘を氣にして、あわびの腹わたを喰わせるのを日課にしてゐた。あわびの腹わたは薬だという習わしがある。父親は、家の者たちがビナや小魚を喰つてゐても、娘にだけはあわびを喰わせた。病気にかかる三日ほど前、ウメコは、朝飯のときポロリと茶碗を落した。一度持ちなおしたが、すぐにまた落したのだった。麦飯がこぼれたので、父親は叱りとばした。その日、学校

へ行きしなにも、ウメコは出口のところで草履がはきにくいと訴えていたが、いつのまにか出て行ったので両親は氣にかけないでいた。その日、学校では一日じゅう運動場の隅にちぢこまり、ふるえていたという。しかしウメコは、帰ってからこのことを両親に告げていなかった。

病院で狂死した少女の話は、尾ひれがついて恐ろしい病状の噂をうみ、部落じゅうにひびいていった。

「魚と貝に毒があるんじや。猫が喰って死によったが、人間もかかるようになったんじや」

この星の浦部落では、急に誰もあわびの腹わたを喰わなくなった。と同時に、漁師部落からあわび漁は消えたのである。あわびを買ってくれなくなったからだ。しかし、あわびだけに毒がまじっているというはつきりした根拠はどこにもなかった。ボラにも、チヌにも、伊勢エビにも毒がまじっているかもしれないのだ。この恐怖は、やがて、同病患者が続出するに及んで村の漁師たちを打ちのめしたのだった。

星の浦部落から約一キロほど離れた湾ぞいに滝堂という漁師部落があり、五月二十四日の朝、そこで大人の患者が出た。三十二歳の主婦であった。罹病して一ヵ月目に、彼女はカマキリのようにやせ、市立病院でウメコと同じ死にざまをした。猫同様に狂死したのである。

噂は大きくひろがった。「魚は喰うと死ぬぞ」「魚に毒があるんじや」この主婦がいつもたべ

ていたボラの刺身が、ついで部落人の食膳から消えた。

さらに患者は増えはじめた。滝堂部落の主婦が死んでから八月初めのわずか二ヵ月間に、星の浦に漁師二名、大工職一名、滝堂部落に女が二名（うち少女一名）、米の浦に男一名、小学生が二名、どれもみな似たような病状になり、病院に収容された。

魚の毒が猫にだけうつるという見解は改めねばならなくなった。人間を猫踊り病にける毒が魚の腹に潜んでいるのか。漁師は魚が売れないばかりでなかった、自分たちも、いつ病氣にかかって狂死するかもしれないからである。

噂は部落だけの問題でなくなり、病院のある水潟市にひろがった。昭和三十一年晩秋のことである。

水潟市は熊本県と鹿児島県境にちかい海岸にあった。海は不知火の名で親しまれている八代湾である。市は県境の山系から流れてくる水潟川の河口にあったが、近辺には大小あまたの岬が海にむかって櫛目になって没していた。入りくんだ幾つもの小湾は、内海らしい落ちついたたずまいで、波もあらくなかったし、いつも紺青の水が静かな山影をうかべていた。

市は工業都市である。しかし、目だった工場は一つしかなかった。東洋化成工業水潟工場というのがそれである。

工場は駅前の卵形になった広場から百メートル

入った地点に、巨大な軍艦のような相貌で建っていた。硫酸、塩化ビニール、醋酸、可塑剤などが生産の中心になっていた。そのうち、塩化ビニールが主力だといわれた。透明な風呂敷や汚れのおちるティブルクロスが繊維を革命したように、その原料である塩化ビニールはこの工場の伸展の原動力になった。水潟という小さな漁師町が、人口五万の市に昇格して周囲の漁師部落を併合したのも、革命といえないこともなかった。この事件の起きた年度は、五万の人口のうち約半数が工場関係労働者であり、この市の市民だった。

市の駅前に工場がデンと正門を構え、幾本もの高い煙突から黒煙が吐きだされている。空が灰色に染められている有様は、暗い気持の漁村とは反対に活氣にあふれていた。市には工場から出る化学薬品とカーバイトの残滓の臭いがそこらじゅうに充ちていた。それは、すえたようなすっぱい臭いであった。花粉のように舞いおる石灰が家々の屋根瓦を灰色に塗るかえたように、この臭氣は、どここの台所をも吹く風に溶けこんでいった。

市の背後は屏風のように三方から山がかこんでいる。緑濃い潤葉樹と針葉樹が豊かに茂っていた。岬もまた黒々とした樹林である。その岬が山ふところに入江を抱えこむあたりに急傾斜な断崖が見え、裾のほうには散在した漁民部落が見えた。漁師の家はトタンや杉皮ぶきの粗末な小舎のようなもので、背中を向け合ったり、

横向きになったりして、まちまちに建っていた。奇病患者の出た部落は、これらの漁民部落である。第一号患者の出た星の浦は、やはり市の地籍に含まれていた。

熊本市にある南九州大学の医学部に「水濁奇病研究班」というのが自発的にできたのは、それから半年ほどたってからのことである。星の浦部落を皮切りに増えだした患者は大学病院へ入れられ、臨床的にも病理学的にも調査は開始された。病氣の原因は、駅前にある東洋化成工場の排水口に近い湾に、ドベ（海底泥土）が三メートルも沈澱しており、その中に水銀が含まれ、このドベで汚染した海水中に棲息する魚介が有毒化しているらしいことがようやくわかった。奇病患者は魚をたべている。排水口付近の漁民だけが奇病にかかるというのも、その証明の材料であった。

おどろいたのは東洋化成工場側である。そんなはずはない、日本に塩化ビニールの工場はほかにもあるし、水濁市にかぎって奇病が出るというのはいかしくない、だいいち、十年も昔から湾に排水しているのに、今になって病氣が発生している、何か他の原因だろう、と反ばくしてきただけだ。

この対立は病因究明が解決されていないために、紛争は今もなお続いている。病人は増える一方である。四年後の昭和三十四年秋には、八十名のうち三十名が死亡するという事態になっ

た。世間で問題にしはじめたのは、星の浦の少女ウメコが死んでから三年後のことであった。

第一章 不知火海沿岸

木田民平は、この水濁市内古幡の川ぞいの地で外科医を開業していた。彼はその年四十一歳、開業してから十一年目になっていた。

木田は二百二十ccのオートバイに乗って往診に行く。くぼんだ目と小鼻のふくれた顔に愛嬌があり、どこかぶつきら棒で揺落とところのある木田は患者には受けがよかった。請われて彼は水濁市がまだ町制時代からの警察嘱託医もかねていたし、学校にも関係していた。治療も親身だと評判がよい。しかし、いくら評判がよくても町医者であるから繁業は知れたものである。市には市立病院、工場には付属病院、その他種々の公共医療施設が整ってきだすと、木田の台所もそうぜいたくはできなかった。

二人の子供と妻静枝との四人暮らしである。よく働いた。玄關横の待合室にテレビがある。十畳の治療室には塗りかえた白壁と清潔なベッドがある。それらはすべて南向きの窓をうけて明るい。「木田外科医院」と書いた白地に黒のトタンの看板は、古幡の土手の向こうからも見えるように水濁川に沿った屋根の上に高々と掲げてあった。その看板は本緑の汽車の窓からも見えだし、橋の上からも見えた。

木田民平はその日、滝堂部落の漁夫、鶴藤治作の家へ治療にでかけた。

治作とその息子は奇病にかかっている。娘も奇病だったのだが、すでに前年の春に病院で死んだ。奇病は病因がわからない上に、治療方法もわからなかった。いったんかかってしまうと、死ぬのを待つしかないのだ。彼らにとって、どうせ死ぬのならば病院にいるよりも自宅のほうが死に場所としてはよかったのだ。鶴藤治作は娘の死んだことで考えがかわり、息子の安次と二人で周囲のとめるのもきかずに病院を出てきたのであった。これが前代未聞の病魔にたいする治作の抵抗だった。しかし、漁夫である彼には畑は少ない。その上、漁業は中止状態である。収入は工場からもらった第一回の保障金と見舞金だけであった。妻のかねがつくる畑の芋が主食だった。彼女は畑仕事のあいまは看病にあたった。息子は手足が完全に不能になっている。半廃人だが、治作はまだいくらかものは言えた。ふらふらしながらでも、いくらか歩けた。そのよちよち歩きが、怪我のもとになったのだ。

十月初めのある日、庭先の蜜柑をもうとして、治作は踏みはずして石垣の上から顛落した。右肘を骨折する重傷を負った。

木田は駐在所から電話をうけ、治作の治療にあたったのだが、それから今日までずっと治療に通いつめた。奇病患者の治作に憐憫を感じたせいもあったが、別に、木田にはある興味が

あつたのである。

それは、奇病患者を訪問してくる人間に関心をもちたことである。さいきんテレビまでがこの奇病の実態を報じたり、新聞雑誌がさかんに書きはじめた。爾来、治作の家にはかなりの来客がある。治作は言語障害をおこしてはいるが、少しはしゃべれたし、それに奇病患者を代表してものを言う気骨ももっている。木田が治療している日、関西からきた四十年輩の男が、「私は三年間水濁奇病のために深山にたてこもって、特殊草根の栽培に成功しました。その球根から靈薬を発見しました。これを朝晩の御飯の上にばらばらとふりかけておたべください。きつと快癒されると思います」と説明した。その男は靈藥仙丹草という漢方薬を置いていった。木田は見えていて不快になった。

彼ら訪問者は、漁夫が朝飯も晩飯も喰っていると思っているらしい。この山ふところの傾斜地に米はどこで作れるのか。芋しかないのだ。麦は少しはとれる。食料の大半は芋と魚なのである。魚が主食なのである――

その日の客は少しちがっていた。茶色の背広を着た都会風の男だった。三十歳前後だろう。木田が庭先に入ると、男は縁に坐って治作の妻のかねから何か話を聞いてノートに筆記している模様だったが、木田のほうを見てすぐにやめた。遠慮深げに会釈し、そのまま辞去して行った。やせた男である。新聞社の男かな、と木田はうしろ姿を見ながら思ったが、べつに話しか

けなかった。すぐ治療にかかった。

「あんひとは誰だっじゃ」

男が見えなくなつてから木田は治作にたずねた。

「東京からきんなさつたお医者さんじゃ」

「ふーん」

木田は消毒する手をやめて道路を見返したが、もうその男の姿はなかった。

「奇病の研究ばしにおいてなさつたとですげな」

「奇病の研究を？」

木田は治療をすませた帰りに部落を上がって国道を走るとき、バスに乗る茶色の背広をみとめた。治作の家の縁先で男が木田を見た目つきは、陰鬱で、しかも光りのある目だった。

翌日、木田は、その男と崖の上の道でまた出逢つた。男がオートバイの音でふりかえつたのである。バスを待っているらしい。木田は車上からちらと男の目を見た。やはり陰鬱な目つきだ。昨日よりも疲労感のでた弱々しい顔つきだった。男は木田に会釈したように見えた。

「今日も、滝堂でその医者に会つた」

夕食のとき、木田は妻に言った。

「東京から一人で奇病の研究にきているらしい。この病氣もずいぶん有名になったもんだ」

「大学のかたですか」

「治作の話によると、東京の保健所につとめているとかいう話だ」

「じゃ、まだお若いのね」

と妻は言った。

「ひまと金のある奴にはかなわん。湯王寺の温泉に泊まって奇病部落の実態調査らしい。奈良屋にいるとか言った」

「あんたも、たまには温泉につかりたいというんでしょ」

「そういえば、ずいぶん湯王寺にも行かん」
そう言つてから、ごろんと横になった木田は、新聞をひろげて急に目を光らせた。

「水濁にふたたび不穏な気配、二十日の漁民大会にダイナマイトで工場爆破説！」

「またか……」

木田は、見出しから本文に目を転じた。

へる二日、水濁奇病による沿岸漁業の危機を訴えて東洋化成工場に団交を申し込み、これが拒絶にあつて激怒し、暴民と化した不知火沿岸漁民代表三百名は、同工場正門で応援警官隊と激突、二十数名の負傷者をだす不祥事をひき起したが、ひきつづき今日の四日午後一時、またまた、県警本部に、漁民攻勢第二波の物騒な噂がキャッチされた。確実な情報通の語るところによると、県漁連はきたる二十日に水濁市公会堂で東洋化成工場排水停止促進大会をひらき、そのあと漁民大会のデモにうつるが、この日は漁民側より代表者を工場に送り、漁業保障と排水停止の回答を強硬に迫るものとみられる。当日もし万一、工

場側が二日のごとき一方的硬化の態度に出た場合は、全漁民は天草、葦北、八代地方より約三千の船団を組んで水潟市に上陸する。漁民のうちには、ダイナマイトを用意して工場排水口の爆破もやむなしとする過激人員も多数加わっている模様であるというもの。この情報が入るや県警本部は緊張し、境署長を中心に四日後署長室で緊急会議をひらいた。それによると署長は非公式に漁民出の県議を招いて、二十日の大会には絶対に不穏な事態をひき起さぬよう漁民の説得方を懇望した模様である。一方、水木東洋化成工場長、樽見水潟市長、刈谷水潟警察署長とも連絡して当日約三百名の応援警官を待機させるなど、騒擾にそなえて万全の準備にとりかかる旨公表した。

「また、ひと騒ぎおこるそうだ」

「たいへんだわね」

と妻は言った。

木田は一昨十月二日の騒動のとき、治療室に八人の血だらけの負傷者を収容していた。その中には頭を割られた漁民や、手を折られた警官もいた。木田はせまい治療室で、この両方の負傷者を治療したのであった。

「古幡の排水口が爆破されたら、うちの家も吹っ飛ばされないかしら」

「馬鹿なことを言え、石灰山のハッパぐらいで、ここまで被害はあるまい。硝子の三四枚が

割れる程度だ。それよりオキシフルのストックがあったか、見ておいてくれ」

その翌日、また木田は東京のやせた男に出会った。滝堂部落だった。調査に熱心な男とみえて、治作の家に三日つづけてきていたことになる。

綱帯をまきながら、木田は治作にたずねた。

「東京のお客さまは、まだ調査がすまんのかね」

「今日はな、飴玉ばもってきて下さったとすばい」

「飴？ 東京の飴かね」

「へえ」

木田は治作の右肘の油紙からはみ出たイヒチオルをふき終ったとき、その飴の罐が縁先にあるのを見とめた。

「なるほど、栄次郎飴か」

木田はひろげた包装紙の印刷文を読むために取りあげた。と、かすかであるが香水の匂いが鼻を打った。伽羅の匂いである。

木田は石垣の坂道を見上げた。垣根から頭だけ出して登って行く男が見えた。

木田は急いで追いかけた。男は岬のはなのまがり角に立っている。木田を待っていたのかもしれなかった。

「奇病の実態を見られて、どう思いましたか」
木田はうしろから、勇気をだして話しかけ

た。

「そうですね……」

男は微笑しながら木田を見返った。眼下には不知火海と、大小の岬と、それに水潟の市街が絵のように浮かんでいる。眺望のきく場所だった。男は鼻梁のたかい横顔をみせ、じつと街を見おろしていた。昨日とくらべて、さらにいくらか憔悴しているのが木田の目をとらえた。

「米の浦や、星の浦へも行きましたか」

と木田は訊いた。

「ええ、だいたい自宅患者はみな訪問させてもらいました」

喋ってみると、感じのよい男だった。

「ひどいでしょ」

「ひどいですね、東京で考えていた以上でしたよ。市立病院の専門病棟はいつ完成しますか」

「だいぶかかるようです」

木田はタバコを取りだした。それから、男を観察しはじめた。今日は紺色の上着を着ている。昨日はたしかに薄茶色の上下服だった。病院のことなどもすでに調べたとみえる。

「どうです、一本」

「煙」を半分ぬいて差し出した。

「ぼく、喫いません」

男はことわった。

「先生、やっぱり奇病の原因は工場ですね」

唐突に男が言った。くぼんだ目が光っている。その質問にひき入れられた木田は、やがて説明をはじめた。

「南のほうから、順番に湾の名前を教えましよう。百巻、角島、古幡、湯王寺、津奈見です。ごらんない、いちばんこちの湾が百巻ですが、ほら、今、トラククの通る橋が見えませんか」

木田は男の顔に指をつけるようにして言った。白蟻のように走って行く小さなトラククを男はみとめた。木田はつづけた。

「あすこの橋の下に排水口があるんですよ。あすこへ工場は十年間も汚水を流していました。百巻湾の海底にはドベが三メートル以上は沈澱しているはずですよ」

「ドベと言いますと……」

「カーバイトと鉱石の滓ですよ。塩化ビニールの原料はいろいろありますが、主としてカーバイトの残滓が流れて海底にたまっているんですよ。海水の汚染度はひどいもんですよ。この魚をたべると猫や人間が奇病にかかるわけですよ」

「排水口が近くなら、原因はもう証明されたようなものですね」

男は活気づいたように木田を見た。

「排水口に近い部落に患者の出たことは事実です。星の浦が最初に患者を出していますし、出月、滝堂、祖道、と順番に湾に沿うた漁民だけがかかっています」

「今では二十九名も死亡者が出ていると聞きましたが、ほんとですか」

「昭和のはじめに、浜松のアサリ中毒事件とい

うのがありましたが、あの死亡率よりも今度は高いというから、まったくコレラ級ですね。二十九名は事実ですよ」

「百巻でなく、北のほうにも出たというのは、潮流のかげんでしょうか」

男は興味ぶかい目つきを木田に寄せた。

「それは工場が排水口を移したからです。ほら、今、送電線づたいに山から不知火湾へ川が流れこむ地点が見えますね、三角になった河口の近くです。あすこを古幡ちゅうんです。あすこへこの八月から、夜になると工場側は人目を盗んで排水をはじめた。百巻へばかし流していると、奇病部落がうるさいからですね。すると、こんどは新排水口近くの古幡と船浦から患者が出たんです。やっぱり手足の末端異常と脳障害でした。このうち一人はすぐ死にました。いちばんひどかったのです。ほんとに猫みたいに狂い死にしました……」

「排水口を移すたびに患者の地図がかわったのなら、完全に工場が犯人じゃありませんか」

「しかし、御存じかもしれませんが、アリパイがあるんですよ。この犯人は目撃者がいてもアリパイがあるんですよ。つまり、工場の流すのは無機水銀です。なぜ魚の体内で有機水銀になるのかわからんですよ。病因がはつきりわからぬのに、犯人を全面的に買って出るわけにゆかないというのが工場の硬化する理由です」

「漁民の激怒する理由はよくわかりますね」

「同感です。私もわかりますよ。いま、魚が売

れないので、沿岸漁業は死滅直前ですよ」

木田はそう言い終ってから、珍らしく興奮して喋った自分に気づき、かすかに悔いに似たものを感じた。しかし彼は、奇病の原因について自分の意見を述べ終ったあとに感ずる快感も味わっていた。

蜜柑林のはずれにやってくるバスが見えた。「埃をあびるのがイヤですから先に行きますよ」

また会いましょう、という目つきをして木田はキックペダルをふんだ。

ふり向くと、男はバスに飛びのるようになって、かるく木田に向かって会釈したようであった。木田はスピードを出して崖道を走った。

この五日、その男を見たのが最後になった。

木田には甚仇で話相手でもある勢良富太郎という警部補がいた。水濁警察の刑事主任である。主任といっても田舎警察のことだから走りつかいの刑事のような仕事もして、勢良は何かと忙しいのだ。それに、水濁警察署は、今や市ができて以来の多忙のさなかにあるといえた。二日の漁民騒動は二十数人の負傷者を出した。事態は新聞にも出ていたように不穏ものをはらんでいる。いつ、ダイナマイトで工場が襲撃されるかもしれない。工場側も話し合いに応じてようとしない、漁民の怒りも今や頂点にきている。騒擾があつて以来、勢良の足は遠ざかっていた。刑事主任も忙しいのだと木田は思っ

いた。その勢良が十五日の夕刻にひょっこりたずねてきたのだ。

「忙中閑ありかね。どうだ久しぶりに一番やるか、二目の角番だったな」

●木田は碁盤をもち出した。

「それどころじゃないんだ、ちょっと耳に入れないことがあってね」

顎の角ばった勢良の顔は陽焼けして黒ずんでいる。刑事らしく目もとがきつい。今日はその目がいつそう角だった見えた。勢良は言った。

「妙な間い合わせが迷いこんできたんでね」

「間い合わせて、どういふことかね」

「東京からきた男なんだ。なんでも奇病の実態を記録しにきていたらしい。その男が行方不明になったんだよ」

木田民平は息をのんだ。

「くわしく話してくれ、おれはその男に会ってるよ。保健所の男だろ？」

勢良はびっくりして木田を睨んだ。

「どこで会ったんだ、あんたは……」

水濁警察署へ東京から照会してきた手紙は、東京都文京区富坂町二丁目十七番地に住む結城郁子という女からの間い合わせだった。文意の大意は次のようなものである。

結城郁子の夫は宗市といつて、三十一歳になる医者である。専門は神経科で、東京の江戸山保健所に勤務している。結城宗市は、十月一日に東京を發つて水濁市へ行った。約十日間の予

定で水濁市近辺の漁民部落に発生している奇病の実態を見聞するためであった。宗市の目的は、奇病患者と直接会い、その病状を記録し、原因説で騒がれている東洋化成工場の排水路や、その他の事情を実際に見たいという目的であった。宗市は、それまでに、すでに南九州大学の研究班が発表している印刷物や、新聞雑誌に現われた記録などを切り抜いたり、スクラップしたりして集めていた。が、どうしても一見して来なければわからない諸点が生じ、持ち前の探査欲もあつて、彼は十月一日から保健所へ休暇願を出し、十日間の休暇をもらつて水濁へ行つたというのである。宗市は、二日の四時すぎに「霧島」で到着したらしい。

宗市はバスに乗つて近くの湯王寺温泉に行き、奈良屋旅館に投宿した。そこを根拠にして、彼は毎日部落訪問をはじめたのである。宗市は到着してから三通のハガキを東京へ出してゐた。到着の夕刻には電報も打つてゐた。しかし、音信は四日とぎれた。予定の十日がきたが、音信もないばかりか、東京へは帰つてこなかった。今は十四日である。すでに二週間がすぎている。所持金二万五千円は費いはたし、滞在費も不足する時期であることは想像できるが、しかし、保健所にも、自宅にも、宗市からの何らの文通はなく、心配の色が濃くなつてきた。警察で調査してほしい。もし異変が起きてゐるならば、すぐにでも貴地へ出発するつもりである。云々。

「奈良屋旅館に間い合わせたかね」

木田は先ず訊いた。

「電話で照会してみたよ。主人が出てきて、結城宗市という人はたしかに二日に投宿して七日までいた。しかし、七日の夕刻七時ごろ宿を出たまま帰つてこない。貴重品もあずかつてゐるが、身廻品も部屋に置いたままになっているが、奈良屋としては、当人が熊本へでも行つて、目的が奇病の研究であるから、つい時日が過ぎてゐるのではないかと心配はしていた、今日のうちに警察へ届けるつもりでいたというんだ」

「妙な話だな」

「おれは叱りつけたが、電話だからしかたがない。主人は平あやまりにあやまつていたよ」

木田は聞いていて、その男は滝堂の鶴藤治作の家で会つた男だとはっきりわかつた。指で三日間を繰つてみた。すると、三、四、五の三日ともその結城宗市と会つてゐることになった。結城宗市は木田に、米の浦も星の浦も、奇病患者の家々を訪問してきたと語つた。この三日のあいだに、結城宗市は滝堂だけでなく諸所を廻り歩いたわけであらう。それにしても、東京の細君の文面では、宗市から四日まではハガキをうけてゐるらしく、宗市は七日までの三日間、ハガキを書かないで滞在していたとみねばなるまい。

宗市は、七日の夕刻に宿を出てどこへ消えた

のだらう。身廻品や貴重品をそのままにしているのだから遠くへは行っていない。奈良屋の言うとおり、熊本か、あるいはせいぜい福岡か鹿児島ぐらいではないだろうか。だが、福岡にも鹿児島にも奇病についての必要な箇所があるとは思われない。あるとすれば、熊本市の県漁連本部や、水産関係庁、南九州大学ぐらいが要点にはなるのだ。しかし、宗市がそこへ出張し、調査したとしても、二週間の日数は長すぎる。何かの事故に遭遇したとは考えられないだろう。しかし木田は最近、水潟市近辺で、そういう事故死だとか変事にあつた旅行者の話はきいてはいなかった。もちろん、勢良警部補も同様心当りはなかったのである。

「それで、あんたは、どうするんか」

木田は好奇心にかられた目もとで勢良のあつい唇を見ながらたずねた。

「おれは署長に報告したよ。署長は漁民の騒ぎ以来、頭にきている。一人ぐらゐの旅行者の行方不明事件にはあまり関心がないんだよ。しかし、おれはちがう。明日の朝、さっそく湯玉温泉へ飛んでみるつもりだ」

勢良が帰ってから、木田は滝堂部落で会った男の顔をゆっくり思い出した。その男の話しぶりは正義漢らしく、非常に熱意が感じられたと思う。木田自身もそれにつられてだいた喋ったのだから。あの感じでは自殺は想像できない。しかし、あの明るい崖の上の道で、海を背景にして立っていた男の顔は、初対面の木田にもど

こか暗い感じを与えたことは見逃すわけにゆかなかった。すぎ透つたような、冷たい、しかも陰鬱な目つきが気がかりだった。

第二章 保健所の男

水潟市から北へほぼ四キロほど入つたところに湯玉温泉があつた。戸数四十戸ほどしかない漁師部落だが、海べりに都会風な旅館が十軒ほど建っている。この温泉は明礬泉である。神経痛やリョーマチに卓効があるというので、近在からもかなり湯治客があつてきた。江戸時代というから、湯の歴史は九州でも相当古いほうである。部落は旅館のほかに絵ハガキや土産物売の二三の店が目抜きをとりまいていて、傾斜になつた段々があり、褐色の石垣が美しく見え、入りくんだ湾口には島もあり、風光はよかった。

翌朝、勢良富太郎警部補はこの温泉部落のいちばん北の端にある奈良屋旅館を訪ねた。

五十すぎの小柄な当主と女中の民江という三十すぎの女が応対した。民江は結城宗市が泊まつた「竹の間」の係り女中である。

「まず、結城宗市が泊まつていた当時の話をしてください」

勢良はあつい唇を一文字にして不機嫌な目つきで訊いた。

「はい、学者らしいおかたで、気性は顔に似合わず明るうございました。でも、どこか神経質

な点も見られました。お泊りになつた時刻のことですが、御膳に伊勢エビと鯛の刺身を出しました。『これはお湯の窓から見えた水槽のエビかね』とおっしゃいましたが、私どもは伊勢エビを水槽に飼つてお客さまにお見せしました上で召しあがって頂いております。とにかく、奇病がはやりまして、お客さまは魚には敏感でございますからね。『うまいエビだ』といつて、結城さんはみんな召しあがりました。ところが、翌日から急に、魚や貝は何もたべられないとおっしゃるとです。無理もございません。奇病にかかつた患者さんを見てこれたんですもん。『手足をふるわして涎を出して這いまわっている患者を見てきたら何ものどに通らない』とおっしゃいます。水潟の街でさえ、商人のおかたは今は奇病を恐れて罐詰の魚以外はたべていないという時節で、私もそれで、結城さんが気の毒になりましたので、主人に頼みまして、鹿児島島の川内の分店から送つてまいりました霧島の鮎のはらわたをお出ししましたとです。これもおたべになりました。結局、ご滞在中は山芋と、玉子だけしか上がらないのでございますよ。私どもは唐津や鹿児島島の沖でとれた魚をお出しして、近海の魚は出さないことにしておりますが、結城さんはいくら説明してもお上りになりませんでした。神経質なかたで……」

「どうかな、それで結城宗市の態度から急に自殺をするというような感じはなかったかね」

と勢良はきいた。

「さあ、そのようなことは思われませんでしたとです。東京の奥さまに毎日ほどハガキを出されましたし、玄関横の売店で絵ハガキをお求めになりました、お宅の話などないましたが、たいへん明るい話しぶりでございましたよ」

まもなく勢良は民江に案内されて「竹の間」に行った。この奈良屋は、新館と本館とに分れていて、「竹の間」はその中間にあり、八畳と四畳とのつぎ部屋になっている。海に面して広縁が出ていた。縁から下駄をつかけて十歩ほど歩くと波打際だった。そこはコンクリートで固めた腰高の波よけである。上にあがると、二十メートルほどの崖が落ちこんでいるのが見えた。のぞくと、巨大な岩がごろごろしていている。荒波ではないが波濤が小きぎみに打ち寄せていて、始終しぶきが上がっていた。

「ずいぶん危ないところだな。ここは遠浅じゃないのか」

「はい、干潮のときは浅うございますが、満潮ですと危険でございます」

「誤って落ちた人はいませんか」

「いいえ、まだ、そぎゃんことはありません」

主人がこたえた。勢良はそのとき、崖下の水の深さを目測していた。泳ぎのできないものが落ちれば死ぬことは確かだろう。岩に掴まろうとしても、すべてひっかからない。それほど水苔がひどかった。その夕刻、結城宗市はいっ

たん玄関を出た。深更に戻ってきた。海を見ていて踏みはずしたのではない。すでにこの頃から勢良富太郎は、結城宗市がすでに死んでいるのではないかという疑惑をもちはじめていたのだ。

「その夜は酒をのまなかったかね」

「いいえ、夜はノートを出して勉強ばしておられて、六日間ともお酒は召しあがりません」

民江がこたえた。

「結城さんの滞在中、誰か訪ねてきた人はいなかったかね」

「はい、それが……」

そのとき、民江は傍にいる主人の顔つきをうかがうように見てからこたえた。

「ございました。一人いらっしやいましたとです」

「なに、訪問者があったのか」

勢良警部補の目が急に光った。

「なぜ、それを早く言わんのか」

「はい」

民江の目のふちが赤らんでいた。

「七日の六時すぎでしたとです。結城さんは毎日、九時に出て、奇病部落を廻って、判で押したように五時のバスでお帰りなっていました、が、その日にかぎって二十分ほどお帰りが早かったとです。御膳をひきさげたのが六時頃でしたから時間ははっきりとおぼえとります。五十すぎのクリーム色のジャンパーを着た太った背のひくい男の人が見えたとです」

「その男は、それからどうしたのか」

「玄関へきて結城宗市さんに会いたいとおっしゃいました。『きょう街で出会ったとき打ち合わせしてあるから』といって、つかつかと上がってこられたとです」

「ちょっと待て。その男はすでに結城宗市の部屋を知っていたのか」

「いいえ、玄関から廊下が見えます、部屋の前のスリッパが見えるとです。私が指さしましたら、すうーっと入って行かれましたとです」

「それから」

「三十分ほど部屋の中で何か話ばしておられましたが、まもなく帰られました」

「そのとき、あんたはお茶か何かを出さなかったのかね」

「たずねに行きましたら、よろしいと結城さんがおっしゃいました。何かこみ入った話でもあるのかと思つたものですから、そのまま下がりました」

「何か、その男の特徴はなかったかね」

「はい、かすれたようなひくい声でしたが……」

民江は活気づいて言った。

「ズボンに黒っぽい色でした」

「男が帰るとき、何も持って出なかったかね」

「はい、手ぶらでした」

「結城さんはまだ、そのときは部屋に残っていたんだな」

「はい、それから二十分ほどして、結城さんは玄関の横にある広間へきなざったとです。私は